

少年と

良くある恋の話。



始まりの二人

夏休みの校庭は忙しいほど蝉が鳴き、溶けるほど暑く、嫌になるほど埃っぽい。

そんな中で僕は必死にボールを追いかけている。

額にたまった汗を拭い、校舎を見つめた。

三階に見えるあの理科室は、はたして涼しいのだろうか。

閑崎萌花が窓辺に並べられた水槽を見ている。彼女は僕の同級生で、生物部に所属していた。教室ではいつも活発で明るいのに、生きものの世話をしに一人で学校へやって来る彼女は、もの静かでなんだか別人みたいに見えた。水槽の中で泳ぐメダカやグッピーたちを眺めている彼女の姿を、僕は部活をしながらこっそりと見上げていた。

たまたま帰りが一緒になったある日、僕は彼女に声をかけて、思いきってデートに誘った。

「水族館とか、どうかな？」

水族館に誘ったのは魚が好きなのかと思ったからだ。水槽を眺める彼女の横顔をもっと近くで見たい気持ちもあったからかもしれない。恋愛感情とも言い切れない淡い気持ち。彼女をもっと知りたかった。

「いいよ」

気が引けるほどひどくあっさりとしてデートの約束は成立して、僕は逆に驚いた。

彼女はイルカが好きな姪っ子へのプレゼントを探すのにちょうど良かったと言った。

誰もいない通学路で互いの連絡先を交換する。太陽はどこまでも高く遠く、空はどこまでも澄んで青かった。なんだか恥ずかしくて、嬉しくって、怖いような、やけにくすぐったい感覚が胸の奥に広がった。

「じゃあ、明日」

交差点で手を振って別れる。歩く彼女の後ろ姿。熱のこもったアスファルトが、蜃気楼のように彼女を揺らめかせていた。

仲良しの二人

当日、待ち合わせ場所に一時間も早く来て彼女を待つ。僕は少ない洋服の中から最もイケていると思う服装を決めたが、内心は不安で仕方がなかった。何度もトイレへ行っては鏡で確認した。

「おはよう」

時間ぴったりに現れた彼女もいつもの制服姿ではなかった。ノースリーブのシャツに短いデニムのスカートをはいている。すらりとした手足がとても眩しく、僕は目のやり場に困った。あらかじめ買っておいたチケットを手渡して水族館へ入ると、彼女は

「楽しみだねー」

と笑顔で言った。

なんというか、僕はすごく緊張する。隣を歩く彼女の白い太ももをなかなか意識からそらすことが出来ない。自分が邪な顔をしていないか、それだけが気がかりだった。

中へ入ると彼女はひとつひとつの水槽を楽しそうに見て回った。それはいつも学校で水槽を眺めているような落ち着いたものではなくて、何故だかたくたになるほどに痛烈に愉快的なものだった。くつつくほどおでこをガラスに近づけながら彼女が言う。

「すごーい。高足カニが太極拳してるよ」

「いやいやいやいや……のんびり手足を伸ばしてるだけだろ」

「あ、こっちはいくら泳いでる」

「うそ……餌だよ、それ多分」

「アシカって鼻膨らますと可愛いね」

「真似しない。すげー変な顔になってるからっ」

嵐のような騒々しさとで館内を抜けると、屋外のプールが見えてきた。僕は歩きながら疑問に思ったことを口にする。

「ねえ、学校でも水槽見ながらいつもそんなこと考えてるの？」

「ん？」

「いや、だから、なんかギャップが激しいというか……」

「いつもは水槽を見てるんじゃないだよ」

「え？」

「水槽越しに校庭を見てるの。色んなものがぼやけて見えて、それが何だろうって。……いつも君がこっちを見ているのも知ってるよ」

「えっ？ ええっ？」

「あーっ！ イルカのショーをやってる！」

驚く僕を差し置いて、彼女が指差した先ではイルカがプールを気持ちよさげに悠々と泳いでいた。ここの水族館のアイドルであるマッキーとマニーが出演する人気のショーだった。まだ午

前中だからなのか、空席がいくつかあった。僕たちはその中から一番プールに近い席を選んで腰を下ろした。プラスチックの長椅子は少し窮屈で、彼女の細い腕が当たって僕は動揺を隠せない。呼吸も忘れるほどに激しく心臓が脈をうっていた。

係員のお姉さんがかけ声をかけると、マッキーとマニーはテンポ良く様々な技を披露した。隣で目を輝かせる彼女と一緒に、僕もいつしかイルカたちに夢中になった。

「おおっ」

観客がどよめく。大きく跳んだイルカが着水すると、水しぶきが太陽の光を浴びて宝石のようにきらきらと空で光った。ときどきその夏の宝石が、観客席にいる僕たちに降りかかる。その度にきゃーと叫んでゲラゲラと笑った。

ショーが終わって興奮冷めやらぬ中、彼女は僕に顔を近づけてくんかくんかと匂いを嗅いだ。

「イルカが跳ねた水って、意外と生臭いね！」

「その台詞、台無しっ」

その後もわーきゃー言いながら水族館を駆け巡り、気がつけば出口の案内が見えていた。僕が名残惜しく感じていると、彼女が唐突に立ち止まった。

「どうした？」

彼女も出たくないのかと思ったら、視線の先には古ぼけたおみくじの販売機があった。大きなハートの看板にマッキーとマニーが仲睦まじく描かれている。

「引きたいの？」

「……うん」

彼女は食い入るようにマッキーとマニーを見つめている。気持ちのすれ違いを残念に思いながらも、その真摯なまなざしに思わずポケットから小銭を取り出して運命の恋みくじを引いしまった。販売機の下から印刷されたおみくじを広げ、彼女と顔を近づけて恐る恐る見遣る。

「うんと、どれどれ……第2896番、すごくない？」

「……何が？」

「2896って言ったらあれしかないじゃない！ つば九郎の背番号だよ」

「……僕には感心するポイントがわからないよ」

「ぶうううっ」

彼女は頬を大きく膨らませる。

「わかったわかった。続きを読もうよ。運勢は……大吉！ 幾百万人の男女の中から選ばれた二人なのです。かりそめにも不倫の恋に身を破ることなくその日その日を大切にしなさい。きっと愛情あふれた結婚と家庭が約束されるでしょう……だって！」

なんて完璧なんだ！ ブラボーだよ！ 恋の神さま！

僕は彼女とハイタッチをする。ガッツポーズをして彼女は言った。

「やったね、あのイルカのカップルはやっぱり運命の糸で結ばれていたんだよ」

「誰の恋みくじだよっ」

これからの二人

彼女の姪っ子のプレゼントを探すために売店へ立ち寄った。熱心にプレゼントを探す彼女の真剣な横顔に僕はすっかり目を奪われた。それはいつも理科室で見せている表情にそっくりで、誰か自分以外の人のことを考えているとき、きっと彼女はこんな顔をするのだろう。

理科室で考えているのは誰のことなのだろうか。

さっきのイルカの例で言えば、彼女が考えているのはあながちグッピーやメダカのことかもしれないのだけれど。

「ねえ。これどう思う？」

彼女が真顔のまま訊いた。

「うん。いいと思うよ」

「……あの？ ちゃんと見てる？」

彼女は商品から目を離し、まっすぐに僕を見た。

「見てるよ」

「あたしじゃなくて、このマグカップ！」

「ええっ。うんうんっ」

まったく見ていなかったけれど、慌てて首を縦に振る。

「もういいよー。そんな見られてたら気が散るよ。もうすぐ買い物終わるからご飯食べるお店探してきてよ。きっと混んでるでしょ？」

「ああ、そうだねっ。わかった！」

僕は急いで店を出た。

彼女が買い物を終えて連絡してきたとき、ちょうど狙っていた席が空いた。ここのお店のベーコンチーズバーガーはボリュームがあって美味しくて、僕のお気に入りだった。レジで商品を受け取り、向かい合わせの席に座る。そのときにも彼女がハンバーガーを食べるときに押しつぶして平たくして食べるとか、細切りのポテトを一本ずつ食べるとか、新しい発見をした。彼女を知ることがなんだか嬉しい。見られては食べにくいと文句を言いながら、彼女は紙袋を僕に差し出した。

「はいこれ」

「何？」

手にするとずっしりと重かった。

「今日の買い物に付き合ってくれたお礼だよ」

紙袋を開けると中にはマッキーが描かれた水色のマグカップが入っていた。さっき売店で見たやつだ。思いがけないプレゼントに僕は目を丸くする。

「いいの？」

「お揃いなんだからね」

彼女がにっこりと笑った。唇についたケチャップすらも愛おしく感じた。

翌週、姪っ子の誕生日に僕も誘われた。一緒にプレゼントを探してくれたからということらしい。「マグカップを持ってきてね」ということなので、まだ一度も使っていない大切なカップを、紙袋に包んで初めての彼女の家へと向かった。

姪っ子には小さなイルカのぬいぐるみと、彼女には海外のポップなノートを用意した。準備も万端。心臓をばくばく言わせながらチャイムを鳴らす。玄関で出迎えてくれたのは彼女と、姪っ子らしい小さな女の子だった。

「いらっしゃい」

「……お邪魔します？」

ふと気がつくと、その小さな女の子の手には僕と色違いのマグカップが握られていた。ピンクのマニーが可愛く微笑んでいる。

「そのマグカップ……」

「えへへ、もらったのお」

女の子が嬉しそうに微笑んだ。萌花も笑顔で紹介する。

「姪っ子の珠希ちゃん」

「こんにちわ！」

「ああ……こ、こんにちわ」

物怖じしない萌花に似たとても明るい子だったが、僕は絶望の底へと叩き落とされていた。失意のまま居間へと案内される。まさか姪っ子とお揃いだとは思ってもよらなかった。

「準備するからちょっと待っててね」

彼女はキッチンへと消えていく。僕は家から持ってきたマグカップをやけくそ気味に取り出した。テーブルには僕と珠希ちゃんのマグカップが仲良く二つ並んだ。

「おそろいだねー」

珠希ちゃんが楽しそうにマッキーとマニーをくっつけている。

「はは。……そうだね」

僕は力なくうなだれた。

珠希ちゃんが絵を描いているのを眺めたりして待っていると、彼女がイチゴの乗った真っ白いケーキを運んでテーブルの真ん中へ置いた。珠希ちゃんの目がきらりと輝く。

「手作りー。すごいでしょ？ もう少し待ってねー」

彼女が自信満々に胸を張った。確かにお店で売っているケーキよりもクリームの塗り方などにむらがあった。その不格好さに、逆に愛情が感じられた。そしてもう一度キッチンへ行って戻ってくると、テーブルにマグカップをもう一つ置いた。珠希ちゃんと同じピンクのマグカップだった。

「準備完了ー」

ケーキを中心にマッキーとマニーのマグカップが三つ並んだ。カップには珠希ちゃんが大好きなココアをたっぷり注いで、ケーキの口ウロクに火をつけた。珠希ちゃんに口ウロクを吹き消すよう促す。

「みんなお揃い」

彼女が笑った。その無邪気な笑みに、僕もすっかり笑顔になった。

「せーの！」

「ふー」

珠希ちゃんがロウソクを思いっきり吹いた。六本の炎は、ぱっと揺らめき瞬時に煙へと変わる。僕と彼女の声がきれいに重なった。

「ハッピーバースデーッ」

あとがき

『お題：太極拳、水族館、恋みくじ』という某三題噺サイトのお題から連想されたお話です。

.....少しでも楽しんで頂けましたでしょうか？

今回はコメディを意識して書いてみました。

元々は恋みくじを引いたところまでで終わりの作品でしたが、少し物足りなかったなのでその後のストーリーを追加してみました。

(ちょっと蛇足だったかもしれませんがね。)

この作品に特に伝えたいテーマなどがあるわけではありません。

強いて言えば、子供の頃の甘酸っぱい恋を思い出して頂くことが出来れば幸いかな.....と思います。

最後まで目を通して頂いた、すべての方に感謝をいたします。

2011/12/16 第一版

2012/02/08 第二版 誤字脱字の修正

恵賭

コメントに感想など頂けると嬉しいです。